

【領域】学力の向上	
具体的方策	(1)書く活動を通して考えを確かにし、深めていくための指導法の研究・実践を行う。
努力指標	温品塾や学年で研修を深め、各教員が年3回以上研究授業を行う。
結果	3 温品塾を、夏休みを中心に4回開催し、好評を得た。 校内研究授業は、2年生が3回、他の学年は2回実施した。
成果	・学年ごとに、算数科(低学年)、国語科(中学年)、言語数理運用科(高学年)の単元を選定して教材研究を進め、「書くこと」を効果的に取り入れるためのワークシートづくりや教材づくり等を行った。各教員が校内で授業公開を行い、協議会を行って研究を深めることができた。 ・温品塾では、学級経営、ICT機器の活用などについて、ベテラン教員が指導者となり、具体的な指導のアイデアや方法を伝授したり、情報交換を行ったりし、研修を深めることができた。来年度も継続して実施していく予定である。
課題	・校内全体授業研究会(年3回、3学年)、小中連携教育研究会における公開授業研究会(年1回、3学年)、各学年ブロックごとの授業研究(全学年)を実施した。(今年度は、初任者への師範授業がなかったため2回の学年が多かった。)今後も、授業研究について各教員がより一層高い意識をもち、1回1回の研究の場を大事にして、主体的に授業研究に取り組んでいくようにしたい。

成果指標	楽しんで書くことに取り組み、考えを深めることができた児童の割合が80%以上
児童アンケートの結果	
自分の考えや気づいたこと、発見したことなどを書くことは、楽しいです。	
全学年(中間)	
全学年(最終)	
結果	4 児童の肯定的回答(「よくあてはまる」+「ややあてはまる」)の全校平均は、80%でやや減少した。(3年生は増加したが、他学年は減少した。)
成果	・書く活動を取り入れた授業研究を通して指導法の工夫を行ったことにより、書くことを楽しいと感じ、自分の考えを確かにし深めていくことにつなげることができている ・「まったくあてはまらない」と回答した児童の割合が、やや減少した。 (1年生:3% 2年生:5% 3年生:3% 4年生:8% 5年生:5% 6年生:1%)
課題	・中間評価時と比較して、「よくあてはまる」と回答した児童の割合が減少した。学習が深まるにつれて内容が高度になり、よく考えて書こうとすると、楽しさよりしんどさとして感じる児童が多いのかもしれない。学年の発達段階や学習内容に応じて、「書くこと」のねらいを明確にして書くことに取り組む場の設定を適切に行い、書く量などを工夫することが必要と思われる。 (1年生:71% 2年生:45% 3年生:48% 4年生:27% 5年生:25% 6年生:13%)

グラフは、左から「よくあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の回答の割合です。

#### 保護者アンケートの自由記述について

内 容
学習指導について
登下校について(一人になる、通学路、飛び出し等)
保護者との連携・対応(連絡方法・たより)
PTA役員、留守家庭役員について
見えないところでのいじめについて
学級集団・学習規律について
配布物の遅れについて

**【領域】学力の向上**

具体的方策 (2)教材研究を深め、一人一人の考えが生かされる授業実践を行う。

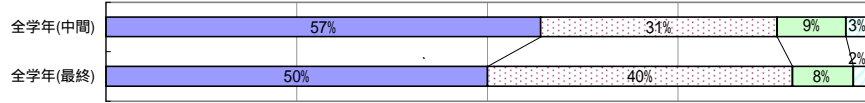
努力目標 個に応じた指導法工夫をした授業が大いに増えた。

結果	3	ICT機器(50インチ大型テレビ・拡大提示装置・ノートパソコン・DVD・デジタルカメラ等)を積極的に活用し、児童が理解を深めるための学習支援を行う回数が増えた。 少人数指導による個別支援を週1~2回行ったり、児童が互いに教え合い、考えを出し合う学習場面の設定を増やすことができた。
成果		・児童の学習への興味・関心・意欲を高めることに効果があるため、ほぼ毎日各学級で50インチ大型テレビ・拡大提示装置を積極的に活用する教員が増えた。さらに、視覚的な学習支援としての活用方法を進んで研究する教員も増え、どの児童にもわかる授業の実施に努めている。 ・授業研究会において、「書く活動」を効果的に取り入れ、児童が思考・判断・表現する場を設定した授業を工夫することにより、児童が授業で生き生きと活動する姿を見ることができた。(学力状況調査においても、授業が楽しいと答えた児童が多かった。)
課題		・新しく配置された電子黒板やノートパソコンなどのICT機器の活用方法については、さらに研修を深めていく必要がある。 ・特別支援や配慮を要する児童の特性を理解し、個に応じて必要な学習支援をさらに工夫・充実していく必要がある。

成果指標 授業が「わかりやすかった」ととらえた児童の割合が80%以上

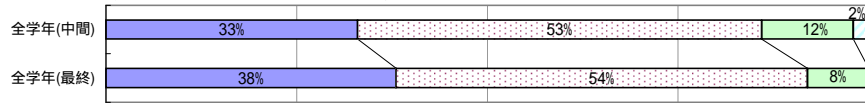
児童アンケート

授業はわかりやすいです。

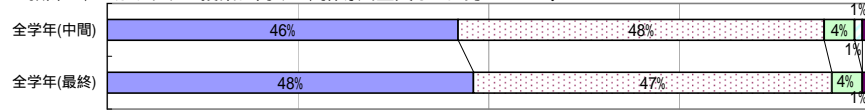


保護者アンケート

お子さんは、授業がわかりやすいと言っている。



教師は、わかりやすい授業に向けて、指導法工夫などに努めている。



結果	4	・児童の肯定的回答(「よくあてはまる」+「ややあてはまる」)の全校平均は、90%でやや増加した。 ・保護者の肯定的回答の全校平均は、92% 95%と増加した。
成果		・教師がわかりやすい授業の工夫に努めたことが、児童にも効果的であったことが伺える。 ・保護者には授業参観の機会や児童の姿等を通じて、教師の授業に対する努力を受け止めてもらうことができたと思われる。

課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「よくあてはまる」と回答した児童が、やや減少した。学年末に向けて学習内容が難しくなることもあり、個に応じた学習支援や授業研究を行う努力がより一層と必要とされる。</li> <li>・「授業がわかりやすい」について「よくあてはまる」と回答した児童の割合が、保護者の回答より高かった。家庭で児童に直接聞いて回答して下さったという記述もあったが、児童の回答とずれが見られた。</li> <li>・否定的回答が減少したが、今後も引き続き児童への指導・支援の工夫に取り組んでいく必要がある。</li> </ul>
----	---

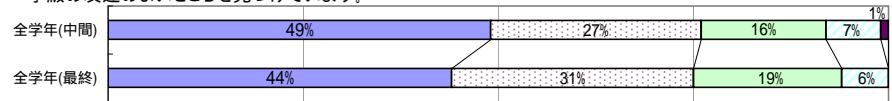
**【領域】豊かな心**

<b>具体的方策</b> (1) 自他のよさに気付き、お互いを大切にしあえる学級づくりをする。	
<b>努力指標</b> 自他のよさを自覚できる取組を年4回以上行う。	
結果	朝の会、帰りの回での「よいところ見つけ」友達のがんばりや自分がうれしかったことの発表 「ありがとうカード」「ありがとうポスト」の活用 日々の発言や文集、作品鑑賞でのよいところ見つけ "Who am I!"で、自分のよさ発見 ペアトークの場の設定 ライフスキル学習の実践 など
成果	・中間評価時と同様に、毎日帰りの会を工夫して行い、互いのよいところを認め合うことができるように指導する上などの取組を日々積み重ねていくことができた。 ・授業の中で教師が肯定的な評価を行う場面を意図的に増やし、児童が自他のよさに気付くように配慮して指導することができた。
課題	・来年度は、市教委が作成した学校適応感尺度(テスト)を導入することによって、より客観的・多角的に学級の実態を把握するようにし、児童が学級への所属感をより高め、自分のよさを自覚できるような取組を計画的に実施していきたい。

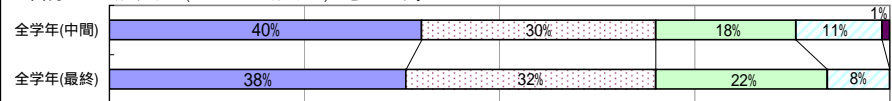
**成果指標** 自分が好きという児童の割合が80%以上

児童アンケート

学級の友達のよいところを見つけています。

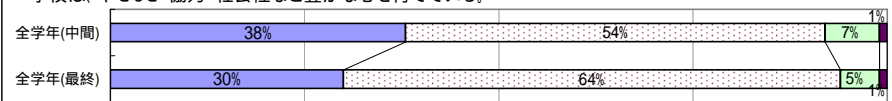


自分のことがすきだ(よいところがある)と思います。

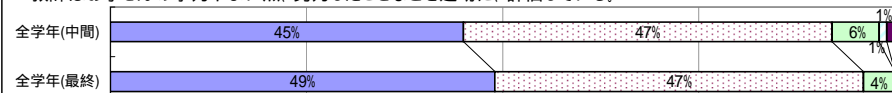


保護者アンケート

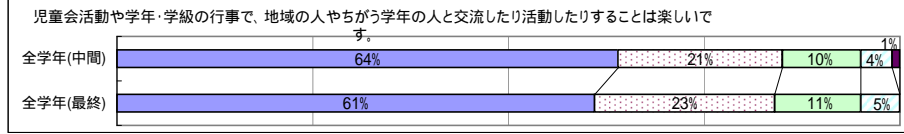
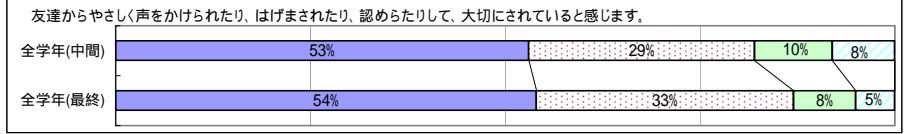
学校は、やさしさ・協力・社会性など豊かな心を育てている。



教師はお子さんの学力やよい点、努力したことなどを適切に、評価している。



全学年(最終)	49%	47%	4%
結果	<p>・「自他のよさに気づいているか」を問う児童アンケート（友達のよいところ）（自分のよいところ）では、肯定的回答全校平均は 74% 70%であり変化はなかったが、「よくあてはまる」の回答はやや減少した。</p> <p>の肯定的回答(1年、3年、4年、6年は減少したが、<u>2年、5年は増加した。</u>)  の肯定的回答(1年、2年、6年は減少したが、<u>3年、4年、5年は増加した。</u>)</p> <p>・保護者アンケートでは、「学校は豊かな心を育てているか」の肯定的回答全校平均は、94%と上昇した。(中間時の回答は88%)(2年は微減)</p> <p>・「教師による子どもへの適切な評価」についての問いの肯定的回答全校平均は、94%と上昇した。(中間時の回答は92%)(3年は微減)</p>		
成果	<p>・各学級において、学級目標に向かって朝の会や帰りの会、学級活動や道徳の時間等を充実させながら、児童の言葉に真摯に耳を傾けて一人一人の思いを受け取り、のびのびと自分のよさを発揮して互いに認め合うことができる学級づくりに取り組むことができた。</p> <p>・保護者アンケートの結果は、中間評価時よりよい評価となった。参観日や学校行事等、また児童の日々の様子を通して、学校教育に対し理解を深めてくださった保護者が増えたものとする。特に、児童の評価については、約半数の方が「よくあてはまる」と回答していただいた。今後も、保護者から信頼される学校づくりをめざし、保護者と教職員が共通理解を深めていながら取組の継続と改善を図っていききたい。</p> <p>・否定的回答のうち「まったくあてはまらない」の回答が減少した。</p>		
課題	<p>・児童アンケート とも、80%を下回る結果であり、中間評価時より減少した。特に「自己肯定感・自尊感情」についての問いに対しては、否定的回答が30%であり、ほぼ横ばいであった。</p> <p>・予防的生徒指導の一環としてのライフスキル教育やピアサポートを取り入れた授業の取組は今年度から始まった。児童の自尊感情を育てる授業を、今後も計画的に実施していき、家庭への啓発も行いながら児童の心の育成を図っていく必要がある。</p> <p>・保護者アンケートからは、概ねよい回答を得たが、肯定的評価の内訳を見ると「よくあてはまる」の回答より「ややあてはまる」の回答の方が多い。豊かな心を育てるための学校の取組をより具体的に実感していただけるよう、情報発信にも力を入れていきたい。</p>		
<b>【領域】豊かな心</b>			
具体的方策(2) 人とのよりよいかかわりをめざした体験的活動を効果的に取り入れる。			
努力目標 効果的な体験活動が大いにできた。			
結果	3	<p>ライフスキル学習(道徳)  ゲストティチャーによる授業(書写、音楽、体育、英語等)  異年齢グループ(温品レイホーキッズ)での活動等)  他学年とのかかわり(学校探検(1・2年) 遠足 給食 掃除 遊び(1・6年)等)  異校種とのかかわり(幼稚園(1・2・5年) なかよし集会 幼稚園たんけん 米づくり等)  地域とのかかわり(昔遊び交流会(1年) 町たんけん(2年) 米づくり(5年) 敬老会(4年) PTA全体活動 感謝の集い等)  学校行事(野外活動(5年) 修学旅行(6年) 影絵劇鑑賞会等)</p>	
成果	<p>・毎年継続して実施している体験活動をさらに充実させられるよう、校内外の様々な人々との交流の場を計画的に設定し、各学年で工夫して実施した。</p>		
課題	<p>・今後は、体験活動の回数を増やすのではなく、児童が体験してよかったとより一層実感できるよう、一つ一つの体験に向かう児童の意欲や活動の質を高めるための取組を工夫していききたい。</p>		
成果指標 一人一人が大切にされていると感じる児童の割合が90%以上			
児童アンケート			



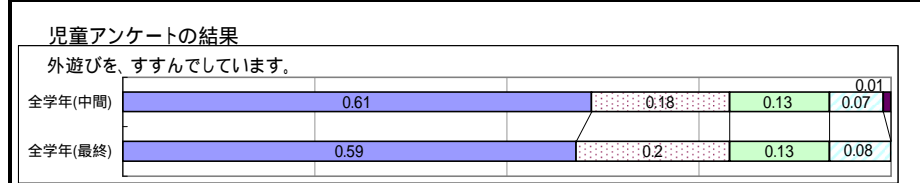
結果	3	<p>「一人一人が大切にされていると感じているか」を問う児童アンケートでは、肯定的回答全校平均は86%であり、中間時82%より上昇した。          (1年生:82% 2年生:84% 3年生:90% 4年生:83% 5年生:79% 6年生:94%)          また、「交流活動は楽しいか」については、児童の肯定的回答全校平均は83%であり微減した。          (1年生:92% 2年生:91% 3年生:81% 4年生:77% 5年生:74% 6年生:80%)</p>
成果		<ul style="list-style-type: none"> <li>各体験活動を通して、児童が各自受け持った役割をきちんと果たし、一つのことをみんなの力で成し遂げる喜びを味わう中で、自己有用感を育み、成長している様子が見える。</li> <li>自分を取り巻く周囲の人々とのかわりを大事にしようとする児童がほとんどで、各活動があることを楽しみにして、積極的に参加することができる児童が多い。</li> </ul>
課題		<ul style="list-style-type: none"> <li>アンケートでは、どの学年も90%前後の肯定的回答であった。今後も、各体験活動の持ち方を工夫して、一人でも多くの児童が「自分が大切にされている」と実感できるような豊かな体験となるようにしていきたい。</li> <li>アンケートでは、4・5年生の肯定的回答が中間時より減少した。与えられる体験活動から、自分達が主体となってつくり上げていく体験活動が増えてくる移行期であることが考えられる。単なる楽しさとどまらず、適度な大変さや苦勞を味わいそれらを乗り越える力を育むことにより、高学年としての自信と実行力を身に付けていくことができる。様々な場面でほめ、励ましなが、指導していきたい。          (1年生:87% 2年生:73% 3年生:65% 4年生:45% 5年生:44% 6年生:43%)</li> <li>どちらのアンケートも、否定的回答の児童が全校平均で13~16%で、あまり変化がみられなかった。今後も、多くの人々と交流する楽しさを感じながら、自己有用感を高めていくことができるように指導・支援を工夫していきたい。</li> </ul>

**【領域】頑張る力**

具体的方策	授業時間や休憩時間を利用して持久力や瞬発力を高める補強運動を行う。	
努力指標	授業や休憩時間に持久力や瞬発力を高める補強運動を大いに取り入れることができた。	
結果	3	授業中に持久力や瞬発力を高める補強運動を取り入れた割合は、全体で80%~90%程度の達成率であった。
成果		<ul style="list-style-type: none"> <li>体育委員会が中心となって、休憩時間に様々な外遊びを準備して呼びかけ、実施した。</li> <li>各学年とも、週に1回以上「クラス遊びの日」を設けて実施した。</li> <li>授業に、敏捷性を高める運動を毎回取り入れた学級が多くなった。</li> </ul>

課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前期は、運動会の練習や新体力テストの実施、水泳指導期間があったため、十分に実施できなかった。</li> <li>・年間を通して体力アップバンドブック、後期にはなわとびカードや日本一周マラソンカードなどに取り組みよう児童に働きかけているが、授業で取り組む時間の確保が難しい面もあるため、時期を設定して取り組んでいきたい。</li> <li>・学校全体で、児童が取り組んだ成果や達成感を、みんなで共有する場の工夫が必要である。</li> </ul>
----	--

成果指標 1年間で持久力や瞬発力が向上した児童の割合が90%以上



結果	<p>児童の肯定的回答(「よくあてはまる」+「ややあてはまる」)の全校平均は、79%であった。(中間は79%)          (1年生:80% 2年生:90% 3年生:89% 4年生:70% 5年生:72% 6年生:75%)</p>
成果	<p>・体育委員会による遊びの奨励や遊具の貸出、学級ごとの全員遊びなどの働きかけにより、寒い季節になっても休憩時間に外で元気よく遊ぶ児童の姿が多く見られる。</p>
課題	<p>・否定的回答の児童が、全校平均で21%と微増した。(中間は20%)特に、1、4、6年生が否定的回答の児童の割合が増加した。全員遊びの取組を継続していきたい。          (1年生:20% 2年生:9% 3年生:11% 4年生:30% 5年生:27% 6年生:25%)          ・毎日のように不調を訴えたり寒さや暑さを嫌って外で遊びたがらなかつたりする児童が見られる。家庭と連携を図って、児童一人一人に合わせた健康管理を指導しながら、体力の向上を図る取組を続けていく必要がある。          (「まったくあてはまらない」と回答した児童の割合 1年生:9% 2年生:5% 3年生:4% 4年生:11% 5年生:10% 6年生:4%)</p>

**【地域との連携】**

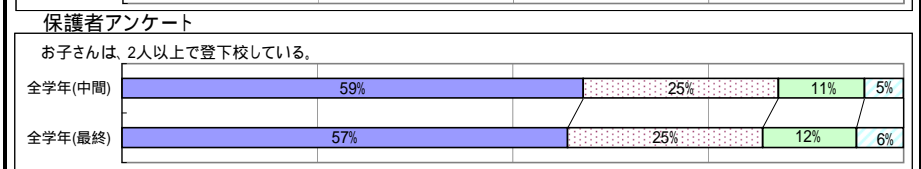
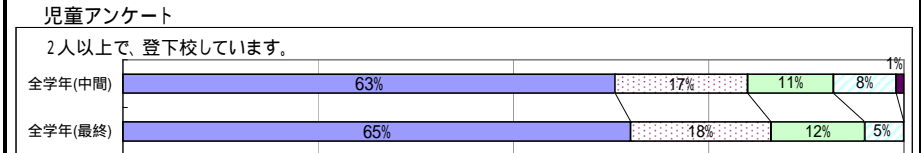
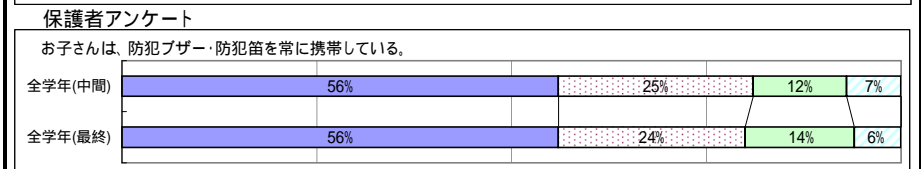
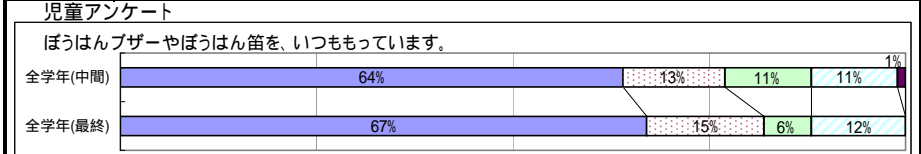
具体的方策 危機回避能力育成のために、具体的な場面に即した安全指導を工夫する。

努力指標 具体的な場面を想定した安全指導を十分工夫した。

結果	3	<p>1年...「3」毎日の下校指導、安全マップの作成。          2年...「3」安全マップの作成、不審者情報に対する指導、防犯ブザーの点検と個別指導。          3年...「3」安全マップの作成、不審者対応の実際、避難場所・避難経路の確認。          4年...「2」「子ども安全の日」に事例をあげての指導、防犯ブザーの確認。          5年...「4」毎日の防犯ブザーのチェックと指導、日常の具体的な指導、子ども110番の家。</p>
成果		<p>・全校で、夏休みの登校日に集団下校を行い、青少協の方々や保護者と一緒に通学路の安全を確認するとともに、子ども110番の家を確認することができた。          ・学年の実態に合わせて、地域ごとのグループに分かれて通学路の危険箇所とその理由を確認し、安全マップを作成した。          ・毎月の「子ども安全の日」に安全目標に即した指導を行い、防犯ブザーや笛の重要性について話をするとともに、動作確認を行った。          ・日常的に具体例をあげながら安全指導をした。          ・夏休み中の危機管理研修を生かして、実際に教室へ不審者が入ってきた場面を想定し、避難場所や避難経路を児童とともに確認した。</p>

課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後も教職員の危機管理研修の場を設け、それを生かした児童への指導を全校で行っていききたい。</li> <li>・危険を感じた時の対処の仕方など、繰り返し継続して具体的な危機回避の方法を指導していききたい。</li> <li>・「子ども110番の家」や見守り隊、見守り活動、交通安全推進隊など多くの方々にお世話になり、見守っていただいているという気持ちを忘れず、児童が自分で自分の身を守るという意識や態度を育成していききたい。</li> </ul>
----	---

**成果指標** 防犯ブザーを常に形態し、二人以上のグループで登下校する児童の割合が90%以上



結果	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防犯ブザー等の携帯について、児童の肯定的回答は増加したが、保護者の回答は微減した。</li> <li>・2人以上の登下校については、児童の肯定的回答は増加したが、保護者の回答は微減した。</li> </ul>
成果		<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎月「子ども安全の日」を中心に、各学級で防犯ブザーについての指導を定期的を実施したため、児童の意識は向上したと思われるが、毎月教員が児童に対し調査している携帯率(実際に防犯ブザー・笛をもっている児童数)は、67~70%当たりであり変化が見られない。</li> <li>・子ども会による集団登校や学校の下校指導等の取組、各家庭の防犯意識の向上により、できるだけ一人で登下校しないという意識は概ね保たれている。</li> </ul>
課題		<ul style="list-style-type: none"> <li>・防犯ブザーが故障したり紛失したりし、そのままにしている児童が多く見られ、あまり改善されていない。携帯率の向上のため、保護者の協力を引き続き呼びかけていきたい。</li> <li>・住んでいる地域等の事情などから、仕方なく一人での登下校をさせているという保護者からの声がある。PTAや子ども会等とも連携を図り、2人以上での登下校ができるよう学校としてできる協力や呼びかけを行っていきたい。</li> </ul>













